

雜 錄

對支文化事業と吾人の之に對する若干の希望

田 崎 仁 義

一

現に企てられ既に其の實行に著手せられて居り、日華兩國人の一部のものによりて相當に期待せられて居る對支文化事業なるものは如何なる目的意義を以て起されたるやと云ふに、大正十二年三月十五日第四十六議會衆議院に於て時の外務大臣内田伯が對支文化事業特別會計法案を提出したる際に行ひたる説明演説に其の要旨は盡されて居る、曰く。

我國と支那とが古來特殊緊密の關係にありますることは、私が茲に喋々する迄もあ

りませぬ。而して此日支兩國民の間に眞の了解を齎す爲には獨り政治的經濟的方面のみならず、文化的方面に於きましても互に大いに努力を致す必要があると存じます。即ち之が兩國民間の了解の根柢をなすものと存じます。時々起ります時々の當面の問題を離れて、永遠の國是と致すべきものと信するのであります。之まで支那に於きまして、本邦人の手に經營せられました文化事業は相當にございますが、其規模が概して小さく其範圍も割合に狭かつたのであります政府に於きましては、豫て是等の

ことを遺憾と致しまして若干の施設に對しては國費を支出して補助を加へ、且つ之を獎勵し來つたのであります、然るに御承知の如く大正六年十二月より昨年十二月まで即ち過去五箇年間支拂延期中でありました所の義和團事件賠償金の支拂が再開せられまして、昨年の十二月よりは所定の金額が日本に這入ることになつたのであります。

此賠償金元利は今後二十三箇年間に年賦を以て償却を受けることになつて居ります、又山東鐵道の補償と致しまして交付を受けまする國庫證券中賠償金特別會計に屬する分が公有財産及び製鹽業の補償として交付を受ける國庫證券中製鹽業者に交付すべきものを除きましたものは、十五ヶ年間に其元利を償還することゝなつて居ります、又山東に於ける鑛山に對する補償と致しまして交付を受けまする現金中、賠償金特別會計に繰入れらるべき分を除きたる殘額を加へまして本特別會計の財源と致しまして

一層對支文化事業の爲に盡すことゝ致したく本案を提出いたしました次第でございます、而して此事業が永年に互り繼續すべき性質のものであります故に、成く可く多くの資金を積立てるの必要がありますことに鑑みまして、之を特別會計と致した次第であります、本特別會計法案の目的と致しまする事業の範圍は大體之を教育、學藝、衛生及び救恤に限ることゝ致しまして、事柄の性質上急速に其効果を收めることは誠に困難でありますことは申す迄もないことであります、其實施の方法に關しましては篤と考究調査を要する必要がある、それ故に十二年度に於きましては差掛り必要を感じて居ります所の在本邦支那留學生の學資補給及び山東省に於ける病院、學校經營の補助、其他二三の事柄に對しまして必要な支出に止め、十二年度に於きましては専ら將來行ふべき事柄に關する調査に力を盡したい考へでございます、委細は別

に提出致しました所の本特別會計大正十二年度追加豫算に依り御承知を願ひたうございます、尙ほ文化事業なるものは其性質上各方面の協力を俟つにあらざれば其効果を擧げ得るものではありませんから、本事業に對しまする調査及び其經營方針等に付きまして、我朝野有識者の意見を徵する爲め、追て適當の機關を設くるのみならず、又進んで支那官民の意見をも徵する爲め、相當なる方法を講じたい積りでございます。

而して其會計法案は僅かの字句の修正を加へたるのみにて兩院を通過し公布せられた次の如きものである。

對支文化事業特別會計法

第一條 對支文化事業助長の爲特別會計を設置し其の歳入を以て其の歳出に充つ。

第二條 左に掲ぐる證券は之を本會計に歸屬せしむ。

一 明治三十四年支那國及列國最終議定

對支文化事業と吾人の之に對する若干の希望

書第六條の規定に依り支那國政府より受領したる四分利付支那國債券。

二 山東懸案解決に關する條約第六條及第二十五條並山東懸案細目協定第十九條の規定に依り支那國政府より交付を受ける國庫證券中製鹽業者に交付するものを除きたるもの。

三 山東懸案解決に關する條約第十五條及第十八條並山東懸案鐵道細目協定第十四條の規定により支那國政府より交付を受ける國庫證券中賠償金特別會計に歸屬せしめらるべきものを除きたるもの。

第三條 山東懸案解決に關する條約第二十二條の規定に依り設立せられたる會社より山東懸案細目協定第二十四條の規定により支拂を受ける補償金中賠償金特別會計に繰入れらるべきものを除きたる殘額は之を本會計に繰入るへし。

第四條 本會計に於ては左に掲ぐる諸收入

を以て其歳入とす。

一 所屬證券の償還元利金。

二 所屬資金の運用利殖金。

三 寄附金。

四 所屬雜收入。

第五條 本會計に於ては左に掲ぐる事業に關する諸費用を以て其の歳出とす。

一 支那國に於て行ふべき教育、學藝、衛生、其他文化の助長（原案には衛生の次に『及救恤に關する事業』とありしを『其他文化の助長』と修正せられたり）。

二 帝國に在留する支那國人民に對して行ふべき前號に掲ぐる事業と同種の事業。

三 帝國に於て行ふべき支那國に關する學術研究の事業。

第六條 寄附金にして特に用途を指定したるものは其の條件に従ひ之を使用すへし
第七條 本會計の歳出額は寄附金に依るも

のを除くの外毎年度二百五十萬圓を超過することを得ず。

第八條 本會計の決算上剩餘金を生ずるときは之を積立つへし。

第九條 本會計の資金は大藏省預金部に預入れ之を運用することを得。

第十條 政府は毎年本會計の歳入歳出豫算を調製し歳入歳出の總豫算と俱に之を帝國議會に提出すへし。

附則

本法は大正十二年度より之を施行す。

大正十一年一般會計に於て明治三十四年支那國及列國最終議定書第六條の規定により支那國政府より受領したる四分利付支那國債券の元利償還金收入として受入れたる金額に相當するものは本法施行の際之を本會計の歳入に繰入るへし。本法施行前第二條第二號及第三號に規定する國庫證券にして本法施行前支那國政府より交付を受けたるものは本法施行の際之を本會計に歸屬せし

む。

二

其後對支文化事業調査委員が選任せられ、又外務省内に對支文化事務局が設置せられ東亞局長たる出淵勝治氏が其の局長を兼ね、其下に岡部事務官朝岡事務官等が其事に當ることとなり、其事業に關して屢々委員等が支那に出張して種々の調査をなしたる上、昨大正十二年十二月廿九日及三十一日に外務省に於て日支兩國間に非公式の打合が行はれ、日本側よりは出淵局長、岡部事務官、伊藤書記官、朝岡事務官、支那側からは汪公使、朱教育部特派員、張參事官、陳學務專員、錢祕書官等出席して十二ヶ條の協定事項を得たが支那側の傳ふる其の内容は左の如くである。

一、日本に於て對支文化事業に關し立案する時は支那有識階級代表の意見を十分尊重すること。

二、團匪賠償金に關する資金は主として支

那人經營の文化事業に用ひ、日本の山東に設立せる學校病院及び現在日本の各團體が支那に於て經營しつつある文化事業の補助費は山東賠償金中より支出す。

三、北京に圖書館及び精神科學研究所を設立す。

(註) 支那閣議では支那人の誤解を慮り文化科學と訂正された模様である。

四、上海に自然科學研究所を設立す。

五、前二項の事業費は別に定む。

(附記) 前二項の圖書館及び研究所の館長所長は支那人中より兩國の協定せる者を以て充つ。

六、將來團匪賠償金項目の資金に剩餘ある時は、更に下記各事業を起す。

(甲) 適當の地を選んで博物館を設立す
(乙) 濟南に醫學校及び附屬病院を設立す。

七、第三項より第六項に至る各項の事業に就ては評議員會を設置し、日支兩國人を

以て之を組織す、其員數は各評議員會とも二十名とし日支兩國より各十名を出し兩國の協定により支那人中より一名を選んで會長とす。

八、北京圖書館及び研究所の用地は支那政府より無償支給す。

九、救恤費の名義は之を慈善費又は其他の名稱に改む。

(附記) 十三年の此項の費用は出淵局長の聲明により十萬元を以て限度とし十四年度より之を廢止す。

十、留日支那學生に對し明年度より次の如き方法により學費を給與す。

(附記) 學費支給の期限は兩國の協定により十年とす。

(甲) 學費は一人毎月八十圓とす(一時毎月十八元と報じたるものあれど其は誤也)。

(乙) 此項の學費の支給を受ける留學生の數は毎年度三百二十名を超ゆるを得

す。

(丙) 前項學生は各省選出衆議院議員數及各省の團匪賠償金負擔額により各省人員を決定し、大學及び專門學校在學生中より之を選ぶ。

前述の大學專門學校は對支文化事業局及駐日支那公使館協商指定す。

(丁) 前項により選拔せらるべき學生は官費生に限らず私費生をも加ふ。

(戊) 選拔せられたる學生にして成績劣等或は操行不良なる者は直ちに其學費の支給を停止す。

十一、留日支那學生本年度給與は下の方法による。

(甲) 第十項と同一の方法による。

(乙) 民國十三年一月分より支給す。

(丙) 從來未納の各學校の授業料は本年末の分を以て支拂ふ。

十二、右學費は支那公使館より支給す。而して本年(大正十三年)六月下旬開催せら

れたる對支文化事業調查委員會第二回總會に於て第一事業として左の如き計畫が決定せられ、其の豫算は臨時議會を通過し本年度の支出額九十五萬圓も可決せらるゝに至つた。

一、六箇年繼續事業として北京に人文科學研究所並に圖書館を、上海に自然科學研究所を設置す、此の總豫算五百參拾五萬圓（其後新聞に表れたる所によると六百五拾萬圓とあるが誤りならん——大毎、七月十八日）。

一、十三年度追加豫算として九拾五萬圓を計上す（北京の分は五拾七萬圓、上海の分は參拾八萬圓）。

一、北京の研究所及び圖書館は鐵筋コンクリート建三層樓、延坪二千坪五ヶ年で竣功、上海の研究所は鐵筋コンクリート建二層樓延坪二千坪三ヶ年の竣功の豫定。

一、北京の研究所には左の八部門を設く。
哲學、文學、宗教、美術、天文、考古
歷史、法制經濟。

上海の研究所には左の二部門を置く。

醫學、理學。

而して其の建築は本年中に着手せらるゝ筈で、其の設計は帝大の内田祥三、伊東忠太兩博士之に當り、北京の方のものは古典的に支那趣味を多分に取入れた立派なる建物に作る筈で、上海のものは實用を主とする近世式のものゝ由である。尙ほ右事業につき出淵局長の談として新紙上に表れたるもの（大毎七月十八日）を見るに。

團匪事件の賠償金の費途に就ては各國共に可なり意を用ひて居るが、我國は右の金にて北京に人文科學研究所を建て、日支兩國から學者研究生を集め宗教、哲學、法制經濟の研究所とし、上海には自然科學研究所を設けて之を理學部、醫學部の二部に分けて、理學部では支那特有の動物や支那地質の研究に従事し、醫學部では楊子江流域の特殊病たる長江赤痢を始め支那特殊の病氣を研究するので兩國からどんな學者を集め

るとか、所長には誰を任命するとか云ふ細目については今後支那側とよく協議した上で決定されるが、支那有力の學術團體たる北京大學や、中華學藝社、教育改進社等からも種々眞面目な意見を提出されて居るから、十分に之等の意見をも尊重し、眞に學問的に日支親善を圖り、一つの立派な機關とする様努力するつもりである、廣東の有力者達からも支那の文明を形造るものには中部に於ける上海、北部の北京、南の廣東であるのに、その廣東だけには何等の施設もなさないのは不明であると云ふて來て居るが第二の事業としては勿論廣東にも立派な施設をする積りである。

三

是で見れば此の對支文化事業なるものが如何にして企てられ、又た如何なる主旨で大要如何なる範圍の事業を爲さんとするものであるかと云ふことは明かな様であるが、然し是

れに對して支那側の人々は如何なる感を抱いて居るか云ふに、無論大に喜び、且つ期待して居るものもあるけれども、又た一部のものとは又例の『日支親善の押賣』かと云ふて嘲笑して居るものもあり、又た中には、日本は曩に軍事提携と云ふことを申込んで來たが其の實侵略主義を抱藏して居るのであるとて大反對に遇ふて失敗に歸したから、今度は文化提携と云ふことを考へたのであらう。要するに日本が中國に對して豫て抱て居る野心を行はんとする手段に過ぎぬ。今日世界の氣勢は平和を欲求して軍事的、偏武的行爲を退けるが故に、品を換へて文化と云ふ美名を假りて來たものであらうと云ふ様に猜疑の眼を以て視て居り、或は事業の執行機關の組織等に關しても少なからず疑問を懷て居るものもあり、本年五月上旬頃に全國教育會聯合會、庚子賠款事宜委員會、中華全國教育經費委員會、中國科學社、中華學藝社、學術研究社、中國地質學會、留日大高同學敦誼社、北京師範大學、

東南大學、山西大學、武昌師範大學等の各團體は聯名を以て大要左の如き宣言を發表せることが報せられて居る。

要するに文化事業は日本内政の延長である今回服部博士・朝岡、小村諸氏來京し文化事業は政治を超越するものであると説明されたが、我々も諸氏の誠意と日本朝野の熱心とを信ずるものであるが、但しこの形式方法は完全に政治の支配を受けてゐる。

この點は如何に説明されても多數の懷疑を免れないところである。況や日本のこの事業に對する方法たるや全然官設の性質に屬し將來支那側より參加する場合支那側の資格が客員であるか、雇員であるか、乃至は屬僚であるか判明しない、この點は最も誤解を招き易く且つ解決し難い點である。以上の誤解を除き良好の結果を得る爲に左の辦法を希望する即ち日支兩國より専門の學者を推薦し、日本の庚子賠款を以てする文化事業の一切の事務を籌畫決定並に管理す

ること、理事の人員は日支折半し別に理事長一名を設け支那側より之に當る事、右の希望は最低限度のものである。日本が若しこの希望を容れなければ參加する事を願はない云々。

以て一部の人々の意向の一斑を窺ふことが出来るのであつて、一には未だ相互の諒解が充分徹底するに至らぬ爲めであり、又一つは近來彼國に起りつゝある排外思想、利權回收論等の影響に基くものであるかと思はれる。丁度其頃奉天支那人間には教育權回收運動起り。滿鐵沿線各地に於ける滿鐵經營の支那人小學校は日本の利益を主とするものであつて支那國民性を破壊するものである、之を放置するは支那の前途を危くするものであるから支那人に對する教育權を滿鐵より回收しなければならぬと唱道宣傳したこともあつたが、要するに其の根本動機は同一であると思つてよからう。然し斯様な誤解や反對は何時如何なる事業にもあり易いことであるから敢て格別

意に介することも無かる可く、前記協定事項には支那方面有識者階級の代表的意見は之を尊重することになつて居るのであるから、眞面目な意見は勿論相當な方法によりて採用通達せらるゝ筈である。

四

尙ほも一つの議論は此の對支文化事業は純然たる學術上の事業で、政治上には何等關係がないのであるから、政客又は政客式學者をして其の研究所長、圖書館長、評議員、評議會長等の地位に割込ましめて、之を政略的の道具に使はす様なことをしたくないこと、又同事業は其仕事を各地に設けることは事業の實際の効果を上げるに困難であるから、其の力を分割したく無いと云ふ様な議論で、主として北京大學側の主張する所である。即ち同大學は左の如き意見書を發表して居る。

一、圖書館長研究所長及び評議會長評議員の選擇は努めて慎重に爲し、純粹の學者

に限り、政客或ひは政客式學者を併入せしめてはならぬ。

二、精神科學研究所及び自然科學研究所を北京と上海の兩處に分設するとの案に對しては満足することが出来ない。それは精神科學と自然科學の研究は理論上或ひは事業上均しく連絡交通の必要があるから、分離して幾多不便を生ぜしむべきでないからである。地點に就て云へば、北京は民國の首都であるから、學術研究所を北京に設けることは、決して北を重んじ南を輕んずるものではなからうかと顧慮する必要がない。

と云ひ、更に博物館醫科大學及び病院のことに關しては、

一、博物館の重要なことは圖書館研究所に譲らない、宜しく速かに設立すべきである。剩餘金のあるを待つて之れを設けるべきでない。

二、本大學は終始圖書館博物館研究所の三

種の事業を眞正永久の文化事業であるとしてゐる、宜しく賠償金の全數を以て事業に着手すべきである。故に、將來賠償金に剩餘のあつた時山東廣東等に醫科大學、醫學專門學校或ひは病院を設けるの計畫には賛同することが出来ない。

此の議論の如きは相當に傾聽す可き議論であると思ふ。單に事業を行ふと云ふことは政客又は政客的學者と稱せらるゝ人達の方が或は手際良くするかも知れないが、元々純然たる學術上、文化上の提携發展を期することを目的として居るのであつて、餘程長年月をかけて事を根本的に進めるのが本旨であるから政治上政策上に超然として倦まず急がず純然たる學術的研究上の遠大高貴なる立場から總ての事を立案し實施して行ける人物を選任することが最も肝要の事であるから、北京大學の主張する人選問題に對する意見は日支兩國共に充分の注意を拂はねばならぬ點であると思ふ。事業實施の機關設置の場所に關して

は、北京に人文化學研究所及圖書館、上海に自然科學研究所を設立することは既に決せられ、更に資金に剩餘ある時は濟南に醫學校及病院を置くことも協定事項中に含まれて居るのであるが博物館の位地は未定で、單に適當の地を選んで之を設立することになつて居る前記出淵局長の話によりて見れば既定北京上海の二ヶ所を選むに當りては全く其の研究所の目的事業の性質から此等の二地を各最も有效であり便利であることが明かである結果、定められたるもので何等政略的動機が含まれ居らぬと思ひ得らるゝと思ふのであるが、第二事業として廣東にも何か施設をする積りの如く發表せられて居る點などは、果して如何なる目的性質の事業であるか、其の種類の如何によりて理論上必ずしも不可ではあるまいけれども、要するに事業を各地に分配するが如きは第一政略的勢力に乗せられ易きの懼もあり、人や金の力を分割する結果を來すから規模効力が弱小薄弱になるので、折角の事業

も姑息不徹底に陥り、其の成果の遠大を期することが出来なくなるの虞がある。全額八九千萬圓の賠償金を基礎として企てられたる事業であるから、之を分散せずに纏めて使用するにせよば相當の仕事は出来可き筈であるけれども、彼所にも此所にも、此の事業にも其の仕事にもと氣澤山に八方美人的に使用しては其の效果は甚だ薄弱なものとなつてしまう。元來支那は言ふ迄も無く世界第一の大國である、國と言ふて適當か何うか疑問であるが、兎に角四億民衆を有する大社會であるから、八千萬や壹億の金で彼方にも此方にも喜ばれる様な事業を仕様等と考へる事が抑も間違である、況んや實際に於ては其の資金の利息によるので今の處年額は僅かに貳百五十拾萬圓以内と云ふ事に協定せられて居るのであるから、少し念の入りの事業ならば、一圖書館一研究所を設立經營する費用としてすら決して豊かな金額とは謂へない金額である。既に定めた北京及び上海に於ける上記の事業につ

いては強ち異論を唱へとはせざるも、資金を成る可く分散せず、集中的に比較的完備せる有力なる機關を建設する様な方針を以て進まんことを希望して已まざる所である。

五

次に其の事業は然らば果して如何なる種類を包含するのであるか、北京の方は人文科學即ち哲學、文學、宗教、美術、天文、考古、歴史、法制、經濟等を研究する所とし、且つ圖書館を建て、研究資料を蒐集整理し、上海の方には自然科學即ち主として理學部、醫學部の二部を設けると云ふことであるが、無論其も不可はないが、然し支那の學問は非常に宏大であるから、是も餘り種々なる方面に手を著けては結局何の方面の仕事も不徹底に了る様なことになるかの虞がある。或る案によると、經子史集全體に互り更に之を時代や性質の上から分類し、其の上人類學、土俗學と云ふ様な新しき方面も加へ、更に事業として

は研究資料の蒐集保存、又は其の複製出版、或は飜書及索引の編纂出版を行ふと同時に殷虛を始め、洛陽長安其他歴史的の遺跡廢墟等の探險調査を行はんとするの希望も有力なる學者間にある様に聞て居るが、何れも必要であり結構ではある、併し實際問題としては左様に何も彼も一時に仕掛る譯にも行くまじく何れも皆な相當に大事業であるから寧ろ其等の中何か最も根本的に重要な事業に先づ其主力を注ぐが得策ではあるまいかと考へられるのである。是につき吾人が、最も緊急重要且つ根本的な事業と信ずる所のものは次の如き事柄である。

六

第一、研究資料の蒐集保存及整理 北京及上海の研究所の事業として研究資料の蒐集の必要なることは頗る當然にして多言を要せざることなるが、廣く一般文化的事業としても此の事は最も根本的にして且緊要のことなり

支那には民間にも往々驚く可き熱心努力を以て大資金を投じて惜まざる大圖書蒐集家即ち大藏書家ありて、其の保存にも整理にも相當の方法を講じ居るの士も敢て少なからざるも其家累代の人々が皆な同様に圖書を愛好し之を研究するとは限らず、或る場合には全く利用せられず空しく死藏せられ居ることあり、斯の如きものは宜しく適當の手續を以て之を公の圖書館又は研究所に移して之を保存し利用す可きなり。尙ほ私人の所藏の場合は相當深き注意を以てするも其の保存の安全を期することは甚だ困難なり、特に戰亂等の際掠略兵火によりて分散滅失せらるゝの危險甚だ多く、從來斯かる事由によりて貴重なる文獻及び文獻以外の資料が永久に亡はれたるもの甚だ尠なからずして識者の痛く遺憾とする所なり。一方に於て歐米人は卓越せる先見明識を以て夙に此の方面に著眼して巨大の金力と巧妙なる方法を以て、之を蒐集購買して、之を自國圖書館、博物館に運び去り、佛の

Bibliothèque Nationale に於ても、英の British Museum に於ても數萬又は十數萬の支那圖書を收藏し魯獨に於ても亦た同じく、米國の如きは此の點に注意し出したるは比較的近時に屬するに拘らず驚く可き熱心を以て其の蒐集をなし居り、其の收藏數は年一年著しく増加しつつあり。予が始めて米國華府 Congress Library を訪ねたるは一九一七年九月なりしが、其時同館東洋部の支那圖書所藏數は四萬餘冊に過ぎざりしが、其翌年十一月予が同地を去らんとする際は既に八萬に近き數に達し居たりき。故に今日に於ては優に十餘萬冊を有するならん。紐育、市俄古等の諸圖書館亦た之に準する有様なり、若し斯かる勢に放任して何等の策を講ぜざらんか東洋文化の研究資料は皆な悉く歐米大圖書館の書庫内に集まり、東洋に於て東洋を研究すること全然不可能となるに至る可し、謂ふ、學問に國境なしと、故に東洋の研究を西洋に於てなすこと敢て不可なし、然れども、西洋の書庫に行くに

あらざれば東洋の資料を見るを得ず、東洋に於て東洋を研究すること不可能なりと云ふに至りては、豈主客を顛倒し、事理を矛盾するものにあらずや、東洋人の恥辱實に是より大なるはなしと云はなければならぬ。是等の點から見ても支那各般の研究資料は之を此際充分蒐集して散逸滅失せざる丈けの方法を講じて置くことは緊急の必要である。

圖書の種類は所謂經子史集の四大部門に互りて何れも皆な必要であるが、吾人の見る所を以てすれば、近來迄餘り一般世人の注意を引かなかつた志類 (Geography, Topography) と叢書 (Miscellaneous or Belles-Lettres) とを特に廣く且つ多數に蒐集する事を急務と考へるのである。前者は風土記とか地方誌とか云ふ様なもので、省志、府志、州志、縣志又は山志、河志等を包含するもので、地理、歴史、土俗、産業等に互る頗る廣汎なる記述であつて實際的、具體的な人文的並に科學的研究上に重要なものである。十九世紀の學問が

世界諸方面の旅記に負ふ所甚だ少からざりしに鑑み、最近の學問が列國の銳意努力する諸調査の報告に基かぬものなきを思はゞ支那文化研究上、上記の志類を重要とする吾人の主張の所以あることが自ら明かであらう。歐米の諸大學、諸圖書館は近來競ふて支那の此方面の圖書を蒐集しつゝあり、如何にも彼等の先見あり且つ其の意圖の遠大非凡なることは實に畏敬に堪へざる所である。我國に於ても近來幾分此の方面の必要を深く感ずるの士を生ずるに至り、東西帝國大學、岩崎家東洋文庫、大連滿鐵圖書館、上海東亞同文書院圖書館等を始め其他に於ても各數十部乃至數百部を蒐集しつゝありと雖も未だ蒐集せられざるもの甚だ多きを遺憾とするのであるが、對支文化事業の一事業として行ふ場合は之を蒐集するには一層便宜も多いことであらうから、是非其缺漏なき様に完全に其の蒐集をなしたきものである。次に叢書は支那學問上の一大叢林であつて、其内容の豊富にして且つ

其の形體外觀も雄偉であることは世界何れの國も其の比儔を提供することは困難であらうと思はるゝのである。尤も甲の叢書と乙の叢書との間に内容の重複するものがあるが如きことは免れないが、之は已を得ないとしなければならぬ。要するに支那學問上の大探險大研究は此等の叢林を奥深く分け入ることによりて始めて遂げられるであらうと思はれるところの絶大の寶藏である云ふてもよいのである。是れ吾人が特に此等のものゝ蒐集に就て其必要を高唱する所以である。さて、此等の資料を蒐集したならば、之を完全に保存して置くことが必要であるから先づ之を通氣、乾燥等を適當にした不燃性の保存所に收藏しなければならぬ。次には其等の資料を種々なる目的標準によりて分類して系統立つたる且つ實用上便利を旨とする目録及び索引を調製することが、其等の資料を活用する準備事業として最も必要である。此の目録や索引の調製の如きは甚だ乾燥無味の仕事であり、且つ

技術的の如くでもあるから一般に學者研究家などが是を等閑に附するの傾があり、自ら斯様な仕事に携ふことは好まない様な風習もあるが、然し眞實深大なる研究を遂げて其効果を擧げんとするには、先づ以て最も大なる勞費を之に費さねばならぬ。始めに此事をしつかりやつて置かなくては愈實際の研究を進めて行く際に非常なる能率上の損失を免るゝことが出來ぬ。大なる目録には分類が大切であり、系統を立てることが必要であるが、同時に目録其者の索引を附することも亦た甚だ必要である。他方に於て大なる統一的目録の外に各種の目的標準によりて分けたる部門目録事項目録、著者目録と云ふ様に大小各種の目的に便利なる各種の目録を調製することが必要である。特に支那には一部の書にして數百卷又は數千卷、或は一萬卷二萬卷と云ふ龐大なる叢書又は百科字彙的の書物があるから其等の内容目録を作成することが必要である。嘗て我文部省の作成したる『古今圖書集成』

の目録の如きものを、もつと廣く他の書物に對しても作ることが必要である。目録の次には索引を作成することが又た缺く可からざることである。十三經索引、二十五史索引、先秦漢魏諸子の索引等無論必要であるが、更に進んでは廣く其他の重要書にも及したい。少くとも主要なる叢書及び志類には是非其々の目録及び索引を附することが必要である。

七

第二、研究資料を複製出版頒布 上記の如くして蒐集整理保存せられたる資料は各其の方面の専門の研究家によりて利用せられ、其の價值と光輝とを發揚せらるゝであらうが、然し其等の研究所を利用することの出来る學者は其の數に限がある。而して重要な研究資料は今日其の殘存部數甚だ少く、且つ其の多くは甚だ浩瀚にして其の價が不廉である爲め研究所を利用する事を得る人々の獨占に歸して、他の篤志なる學者は容易に之を利用す

ることも、手に入るゝことも出来ないで困難するものが少くない。然るに現下の状態に於ては民間の書肆等で其等の書を汎く複製刊行するが如きことは採算上からも、又た其の他の點からも殆んど不可能の事に屬する。一兩

年前上海の商務印書局が『欽定四庫全書』を刊行せんと企てた事があつたが、北京政府は其の原本が、運送の途中又は其他の場合に散逸するの危険があるからと云ふ様な理由で之を同書肆に貸下げることを肯じない爲めに折角の企も中止せらるゝに至つたと聞て居る。

故に右様なものは是非共北京の人文科學研究所の事業として複製印行して貰ひ度い、出来るならば、斯かる東洋文化の精華とも云ふ可き大典籍は之を世界各國の王皇室、政府、大學、大圖書館、及有志學者に頒布する位の事は我が對支文化事業としてはやつて貰ひ度いものである。勿論日支兩國の大學、専門學校府縣圖書館等にも是非備へ度いものである。是等は仕事としては纏まつた大きな方面であ

るが、もつと小さい方面に就ても、數の少い書籍は之を複製出版して世の有志研究者をして其の便益に均霑せしむる様にせられんことを希望するものである。

八

第三、文字に關する研究を行ふこと 文字に關する研究は之を二つに分つて行ふことが必要であると信ずる。即ち(甲)古代文字の研究、(乙)將來日支を眞の同文國たらしめんとする大計畫の爲めにする文字の研究である。

(甲) 古代文字の研究 從來古代文字に關しては金文、石文又は吉金文等と稱し、或は古代の鐘鼎彝器の如き遺器遺物又は款識等に遺れる文字を集めて、其の眞僞を論じ其の讀解を試みたるものあり、或は夏代に既に文字ありと云ひ、或は殷商の字形斯の如しと稱したるものあれども、他方に於ては其の眞を疑ふの説もありたるが、夏代に文字の有りたる

や否に就ては今日に於て未だ之を實證し得ずとするも、殷代以後に之有りたりとするは略ぼ定説とし來れる所、然るに近時河南省殷虛の地より多數の龜甲獸骨の文字發見せられし以來、殷代に文字有りたることは益々明確となりたるも、此の出土の龜甲獸骨は羅振玉氏及び日支の二三の學者の外未だ之を詳細に研究するに至らざるは甚だ残念のことである。是等は無論人文科學研究所の研究事項の一つとして充分科學的に研究す可きものである。而して纏つた研究が世界的に發表せらるゝに至らば、支那の古代の研究に非常に大なる光明を放つ事となるであらう。支那の古代研究を進むる上に於て最も根本的の障礙となることは、一體支那には何の時代頃から文字が使用せられて居つたかと云ふことが科學的に明確でない點にある、支那の太古には結繩があり、神農氏の頃から書契を以て之に代へたと云ふ易の文や、又は黃帝の時に蒼頡が文字を制したと云ふ傳説はあるけれども、從來の學

者の多くは單に傳説として看過し深く之を研究せんとするものは甚だ稀であつた、然し殷虛出土の龜甲獸骨文を見て之を今日現存する原始的民族たる亞弗利加印甸族の諸種の繪文字 Pictographs や『冬紀』 Winter Count 等と比較對照して見れば、前者が後者に比して餘程進化したものであることが明瞭であつて、既に殷代に龜甲獸骨文の如き相當に進化したる文字があつたものとすれば、これより進化の幼稚な文字は其の時代より遙かに以前の時代にあつたであらうと云ふことが推定出来ることである。吾人は曾て拙著『禹貢論』の中に支那の殷代より漢代に至る約二千年間に於ける支那文字の變遷と、カルデアの楔形文字の西紀前三十世紀乃至十世紀の約二千年間に於ける其の變遷、並に埃及の西紀前四十五世紀乃至西紀後四世紀の約五十世紀間に於ける變遷等を比較して、文字には進化遅々性のあることを認め得ることを論じたることあり、即ち文字の如き文化的條件の最根本的要素を

なす機關には其の本性として容易に變化せられ難いものがある、枝葉末節の小事は變化することも改造することも容易であるが、基礎的根本的のものは、變化し難き性質がある、強固性又は抵硬性とでも呼ぶか、變化するにも遅々として長き歳月を要すると云ふ性質がある。即ち吾人が名けて進化遅々性と呼ぶ所の性質を有するものであると云ふことを、吾人は信ずるものである。カルデアの楔形文字は西紀前三十世紀程に存したる形を現今其の遺物によりて見る事が出来るのであるが、其と西紀前十世紀頃のものと比較して見れば相當に變遷しては居るが、しかし此の約二十世紀間と云ふ長歲月の間の變化としては寔に輕微なものであると云はねばならず、又た埃及の Hieroglyphics はフリンダース・ペトリイ教授によれば、第一王朝の創建者たるメネスに關するものが現存物中最古のもので、其の年代は西紀前四千七百餘年なりと云はれて居るが、其の形と Hieratics と呼ばるゝ西紀前

三千五百年頃に使用せられたものとの間には可也に著しき變化のあることを認めることが出来るけれども、Hieratics や Demotics と稱する西紀前九百年乃至西紀後四百年頃迄使用せられた文字とを比較すると、甚しき變化は認められない、其が三千年間の變遷として見るべきに如何に其の變化の遅々たるかを知る事が出来る。斯く文字なるものは進化遅々性を有するものであるとすれば、曩に一言せる支那河南省湯陰縣の古姜里城の遺跡から發掘せられたる龜甲獸骨の文字が、あれ丈けの形體を得る迄の進化を遂ぐるには頗る遼遠の年月を費したことであらうと推論することは強ち無理のことではない。今日人種學者等の調査した所によれば、文字と云ふものゝ原始的の形態は或はメキシコの Quipu 即ち結繩、又は北米印甸人の『ワンプン』Wanpun 帶に織出されたる象形、或は近時西歐の諸所に發見せられたる後の氷河期以前に洞窟内に住んだ原始的民族が洞窟の側壁に刻みて遺したる

岩刻繪 Petroglyphs 又は北米印匈奴族其他の原始的民族が岩石、木皮、獸骨、獸牙、龜甲等に刻し又は書き遺したる繪文字 Pictographs 等を見れば、實に最も原始的なる、幼稚此上もないものと認めらるゝものから漸次に幾分づつの進化發達をなしたりと認む可き各種の程度のものであることが出来るのであつて、般虛の地より出でたる龜甲獸骨の文字の如きは其等のものと比較して大に進歩したる高級の發達進化を遂げたるものであつて、而して最も原始的なるものから、此の程度の發達を遂げるまでの進化を克くするには、容易ならぬ歲月を要したであらうと考へられるのである。換言すれば、支那の頗る遙遠の太古には今日迄に發見せられたる原始的の文字の中の最も幼稚なるものに對當す可き程度の萌芽的文字、若し文字と云ふが失當なれば、意思表示の符號が發生して、其から漸次に序を逐ふて進歩の階段を遅々として經過し、其の間にはメキシコの Olmecs の如き形をとりたるものも

出來たであらう、此を易には結繩云々と云ふ傳説になつて遺つたのではないか、又た河圖とか洛書とかなどの傳説も強ちに荒唐無稽である、後世の偽作捏造であると抹殺し去らずに結繩とか八索とか云ふものと共に Ouipou とか又は其他の民族の間にある結繩法、或は古代『マヤ』の使用したる曆石に現はされたる點劃繪文字と比較研究をなす可き性質を有するものとして科學的のテストを加へて見るべきものではないか、其他、孔安國の『尙書序』や『周禮』並びに『左傳』の上などに見ゆる所の三墳五典八索九丘等と稱せらるゝものも、原始的の文字を刻せる墓、碑、其他のレコードではなかつたかと云ふ風に考へて研究をして見ては如何なものであらうか、『韓詩外傳』には黃帝學乎大墳、顓頊學乎祿圖とあるが之を何と見る可きか、單に傳説なりと笑殺し去らずとすれば、どう見るか、大墳と祿圖を人名と見る從來の見方に對して、墳と圖と云ふ字に重きを置いて、三墳の墳、河圖の如き

意味にとりて解釋を試みることは無用であらうか、斯く考へれば、種々なる疑問も起つて來、又た少なからざる暗示を感得することが出來ぬでもないかと思ふのである。要するに殷虛出土の甲や骨に刻したる文字の如き形體と云ふものは、決して一時一代に出來たものではないと云ふことだけは科學的に頗る明瞭なことであらう、そうして見ると、あれ丈けの進化を遂げた文字が殷代に使用せられて居たとすれば、其の前代にも其より幼稚な形の文字があつたと見るのが至當であり而して左様な考を以て見れば、是迄單に荒唐無稽として等閑に付せられ來つた傳説の中に幼稚なる文字の存在を傳ふるものが少なからずあることが分つて來て、而して其が、世界の各地の原始的民族が、曾て使用し又は現今に使用しつつある原始的文字の彼れや是れやに相當する形體を有して居つた如くであることが考定せらるゝことになるのであつて、支那の古代史を研究する上に於て、非常に重大なる關係

を有つことになるのである。即ち『易經』とか『尙書』其他の周代以前の經書が全然文字の無かりし時代に只だ語り繼ぎ言ひ繼いで來たものを突然文字に書き下されたものであるか、或は太古の時代から其の時代に存した極めて幼稚な文字、即ち繪文字の如きものに記録せられ、其の記録を中心として傳説を附帶して來たものが、後世文字が進化發達して更に詳しくことを記述することが出来る時代に至つて書き改められて、現時に遺されて居る様な文書となつたのであるかの如何によりて其等の古書の記録としての價值は非常なる相違を來すことになる、私は曾て拙著『禹貢論』に於て、約七十頁に亙る論究の結果、堯舜禹時代に既に幼稚ながら文字的の記録用具既に存し、禹貢篇は其内容事實のありたる當時に文書的記録とせられて後世に傳へられたるものなること（但し禹の時代より孔子の時代迄は約千七百年の時間的距離あるが故に其の間に原文に多少の増減變化を加へられたる可き

ことは之を認容す。論じたことがあるが、未だ廣く世の學者の承認を得るに至らざるもの、如し。勿論吾人の所論に於て、其の論證の材料及び其の方法に於て尙ほ不備の點のあるを免れざる可けれども、今日吾人の前に提供せられたる資料と方法とを以てしてはあれ以上のことを論明するは甚だ困難なり、是以上の方法は吾人は之を科學的なる大規模の發掘及び探險事業によらなければならぬと信ずるものであつて、其様に多大の人力と費用とを要する事業はなかなか一介の學徒の獨力では遂行なし難きことであるから、是非とも今度の對支文化事業中の一大重要項目として相當の年月と費用と、之に關係ある各方面の専門學者の協同的努力とを以て成し遂げる様に致し度いと切望するものである。此事業が成功した曉には支那古代の研究に一大新光明を加ふることになるのであらうと思ふのである。而して其の發掘なり探險なりは太古の王者の都したる所の遺跡等に就てなさざる可きであ

るが愈々何れの地が其の地點であるかを決定することも亦た甚だ容易のことではなく、大に研究を要することであり、又た支那の其々の方面の學者も當局者も充分其の必要を諒解して便宜をはかり、援助を與へる様でなくては成功し難いことであるから、旁々對支文化事業と云ふ様なものゝ力によらなければならぬと云ふことになるのである。

九

(乙) 將來の文字に關する研究 是も非常なる大事業である、即ち日本と支那とは將來如何なる文字を用ふるがよいかを大局より考究して出來上つた成案を實施すると云ふのが其の一般的考であるが、私の之に對する主張としては、曾て東亞經濟研究誌上にも開陳したこのある通り日支の間に眞の同文を實現することが必要であるとするのである。即ち今日、日本と支那とは同文なりと稱するけれども、實は然らずして單に同一なる文字を異

なれる文法と讀音によりて使用しつゝあるのであつて、同字とは謂ふことが出來ても、同文とは云はれないのである。歐米諸國が共通に『アルファベット』を各其の異なる國語上に使用して居るが如きものに過ぎない。吾人の主張する眞の同文と謂ふのは、英と米とが全然同一 language を使用して居るが如き意味のものにしたいと云ふのである。日支兩國に互りて其の漢字の讀音を統一共通にすると云ふことは、頗る難事であるには相違ないが、然し相當な方法と努力とを以てすれば、決して至難の業と云ふ可きでなからうと思ふ。支那が現に國音國語の統一事業に着手實行しつゝあるを見ても實行可能の業であることは分る次第である。既に支那四百州と云ふ大地域大人口に對して其使用する國音國語の統一が出來るならば之を更にもう少し擴張して、支那國內に止めず、日支共同して斯の事業を遂行したいと思ふのである。其と同時に吾人は日本の片假名、平假名、朝鮮の諺文、支那の

最近制定した注意字母の如き音標文字は、どうしても漢字の補助として必要であるが、現今の如く漢字を共同に使用する國々の間に其等のものが分立特存することは甚だ不便不利であるから、此を整理統一するか、又は新に進歩せる音標文字を制定して之を日支共通の使用に供したならばよからうと思ふのである。次には漢字の數を制限することに關しても、もう一步研究する必要がある。元來文字の如きは數千年來積集したる文化の產物であつて大海の魚族、大陸の草木が、自然に發生蕃殖進化の結果今日の如き多くの種類が出來た様なものである。進化の理法による淘汰の結果であつて其の間に自ら適者存榮の理法が行はれて居るのであるから、人爲的に制限などを加ふることも進化の理法に合致せざるに於ては畢竟無效であつて大海の魚族の蕃殖に人爲的の制限を加へんとするが如きものである。吾人は寧ろ之を文化上の自然淘汰に委するの賢なるを信するものである。一步を譲りて便宜

上必要上出來得る限り合理的方法を以て漢字數を制限するに於ても日支の共同事業として之を行ふを可とす、然らずして日本に於て假令二千字に制限するも、支那は之を七千字（民國二年漢字讀音統一會の審議の結果漢字を七千餘字に、公選限定することゝなり居れり）に制限すとせば、其の差の五千字は滔々として支那より日本に入り來る可く、若し其の流入を防止するならば、日支の通信交通に至大の滯滞を來す可し、日本單獨の漢字制限論者は斯かる實際問題に對して果して如何の策を施さんとするか、故に吾人は是等の問題は日支共同して慎重に其の研究をなし遠大の企圖を以て東亞文化の向上發達を理想として之を解決す可きものであると信するものである。故に對支文化事業に於て當然真先に其の研究題目となす可きものであると思ふものである。

論者或は漢字の難澁なることを指摘して寧ろ之を廢止し、他の文字を以て之に代へんと

唱ふるものあれども、是れ多くは空想家の夢想的議論にして甚だ非實際的の見解なり、今日漢字を使用する國民の人口を見るに支那の四億三千三百萬と我日本の七千七百萬、此の二國のみにて五億一千萬あり、古今東西、何處に斯かる大なる人口によりて使用せらるゝ文字あるか、英語、露語、獨語、佛語、西班牙語等は所謂文明國強大國が使用する言語文字なるが故に世界に於て其の勢力大なるが如く見ゆると雖も其の人口の上より見るときは五億と云ふ漢字使用人口の偉大に比す可きの絶てこれあることなき也、斯かる偉大なる文化上の利器を廢棄せんとする者の無謀や、暗愚や全く常識を以て理解す可からざる所である。漢字の筆劃難澁なるもの少なからざる其の不便と不利とは吾人元より之を知る、故に吾人は漢字の改良修正の要を唱ふるものである。然しながら改良にも修正にも文字學、言語學上の基礎ある考究の結果を待つ可きものにして一時一時代の便宜、一部俗人の思付

等によりて輕々に之を改む可きにはあらずと信ずるものである。且つ此の點に於ても日支は共同して事を完成することが必要であると主張するものである。

十

以上は吾人の對支文化事業に對する希望の主要なる一面である。尙ほ他に幾多の希望もないではないけれども、先づ上記の如き根本的事項に主力を傾注して遠大なる効果を擧げるに力めることが最も重要である。多岐に互るを避け、經費の分割を戒むるにあらざれば遠大の効果は擧げ難い。切に當局關係者の慎重なる考慮を乞ふて已まぬ次第である。